Doctor Column

呼吸器外科

肺の手術の変遷（へんせん）

市立函館病院

呼吸器外科

馬渡　徹　医療部長

呼吸器外科医の主な仕事は肺の手術です。平成初頭からこの仕事に携わってきましたが、肺の手術方法は時代の流れとともに変化してきました。

肺は左右一対にありますが、まわりは多くの肋骨（あばら骨）フレームからできているカゴ（胸郭（きょうかく））に囲まれています。更にそのカゴは筋肉や皮膚で覆われています。ですから、胸の皮膚や筋肉を切っただけでは肺の手術はできず、カゴの肋骨フレームをこじ開けて（開胸）手術を行っていました。これを開胸手術と呼んでいます。この方法は長く標準的な手術方法として行われてきましたが、創（きず）も大きく痛みも強いという難点がありました。

次に現れたのが胸腔鏡（きょうくうきょう）（カメラ）手術です。これは細いカメラや器具を肋骨のすき間から胸の中に入れてモニター画面を見て手術を行う方法です。創も小さく、カゴをこじ開けたりしないので痛みも少なく開胸手術にとって代わり広がっていきました。

そして現在ではロボット手術が時代の先端手術として行われています。この手術はカメラから映し出されるモニター画面を見て手術をする点は従来の胸腔鏡手術と同様ですが、胸の深部でも自由に動くロボット腕を介して手術を行うことで細かい手術操作ができるようになり、精緻（せいち）で出血の少ない手術ができるようになりました。肺のすべての手術が適応とはなってはいませんが、今後、更に普及していくと思います。

時代と3つの手術を照らし合わせると、昭和ー開胸手術、平成ー胸腔鏡手術、令和ーロボット手術と言ったところでしょうか。古い手術にはネガティブな印象をお持ちになるかもしれませんが、開胸手術でないと治せない場合もありますし、最新のロボット手術が適さない場合もあります。体や病気の状態により3つの方法のうち、どれが適しているか選択して手術を行っています。

肺の手術方法の変遷を述べましたが、皆さんが手術とは無縁で健やかに過ごされることを願ってやみません。

略歴

平成2年、札幌医科大学医学部卒業後、札幌医科大学附属病院、道立釧路病院、小林病院、日鋼記念病院、道立苫小牧病院、恵庭第一病院などで勤務。平成17年より市立函館病院で勤務し、20年5月より呼吸器外科科長、令和6年4月より同科医療部長に就任。日本呼吸器外科学会呼吸器外科専門医。日本外科学会外科専門医。